

地上階の建築

茅葺き屋根の家屋は日本各地にあるが、合掌造りの家屋は、土壁ではなく木造であることが特徴である。これは、白川郷の北に位置する能登（現在の石川県）や、南東に位置する飛騨国（現在の岐阜県）の高山から、専門の大工を呼び寄せることができたからである。地元では大工の仕事が一年中あるわけではないので、家を新築するときには他地域から大工を呼ばなければならなかった。

合掌造りの最初の工程は、家の柱となる礎石を積むことだった。支柱を支える適切な位置に石を置き、何十人もの人がロープを引き、櫓に吊るした太い木槌を持ち上げた。タイミングを合わせて、村人たちが縄を放すと、重い丸太が降りて、石を地面に叩きつけた。家の柱となる石が打たれる前に酒で祝福され、土台が完成すると、未来の家の幸福を祈る小さな儀式が行われた。

次に、専門の大工がこの礎石を土台にして家の骨組みを作った。近代的な測量器具がなかった時代、大工たちは鉛直線や縄などを使って、骨組みが正しく配置されていることを確認した。また、木の柱の底を礎石と正確に一致するように彫り、岩の凹凸を考慮した。その後、柱が完全に水平に立つまで何度も調整した。

骨組みを構成する柱や梁は釘で固定されるのではなく、接合技術でつながれていた。一方の木材に設けられたペグが、もう一方の木材に設けられた同等の穴や溝にはめ込まれ、固定される。正しい順序で組み立てることが、継ぎ目をしっかりと固定するために不可欠だった。大工は、大黒柱のある部屋から一部屋ずつ組み立てていった。

家の骨格となるのはウシノキと呼ばれる大きな梁だ。アゼに見立てて名付けられた「チョウナ梁」と呼ばれる曲線の梁を使い、ウシノキを 90 度の角度でまたぐことで、内部を拡張することができた。梁のカーブは、山の急斜面に木が生えるときに自然に生じるもので、天然のアーチを作り出し、骨組みの強度を高めている。

一階部分が完成すると、上部にはウスバリと呼ばれる細い梁が並べられ、その上に屋根のトラスが設置される。ここからは村人たちが大工から仕事を引き継ぎ、屋根を組み立て、葺く作業に入る。ウスバリの上で屋根がずれないように小さな留め具が使われたが、留め具と屋根は連結されていない。